

今日のわだい

- [1面] 東日本大震災—その時 6月に女性集会を開催
- [2面] 全国各地から医療支援
- [3面] 新人さんへ労働組合とは



全 国 労働組合連合会
 厚生連 東京都台東区入谷
 〒110-0013 1-9-5
 TEL 03-3874-3591
 FAX 03-3874-3593
 発行日 毎月 20日
 定 価 30円



がれきの山と化した南相馬市

東日本大震災— 医療現場を支える労働者

3月11日に起こった東日本大震災から、一ヶ月余り。最大震度7の巨大地震に加え、大津波、そして未だ収束の見えない福島原発事故、それに伴う風評被害など、被災地は三重・四重の苦難を受けています。

死者は分かっただけでも1万3千人（4月10日現在）を越え、行方不明合わせて3万人近く、避難している人も15万人余とされていますが、まだ被害の全容もつかめていません。
 まだ震度6程度の余震も起こっており、福島原発事故とともに復旧の足かせとなっています。

仲間は最後まで助ける 医療機関の使命を持って福厚労

県内に6病院がある福島県厚生連では、地震による建物の大きな被害（一部損壊あり）はなかったものの福島市にある厚生連本部の建物の損壊が激しく一時機能停止状態で、全体の状況がつかめない状態でした。
 労組では地震発生後、いち早く災害対策本部を作り、厚生連とも一体となって対策を行ってきました。職員・患者の被災状況把握、

大震災—その時わたしは

松崎 純子（福厚労双葉分会長）

3月11日14時46分 この日はリーダーだったが、病棟も落ち着いており「今日は17時で帰れるかな」と思いながら、3病棟浴室で入浴介助外回り中だった。最初はゆっくりとした揺れ。5病棟に繋がる渡り廊下の防災扉を押さえていたが、大きな揺れとなって、すぐ自分の立っていた渡り廊下と3病棟の接続部が落下し、3階から1階まで穴



避難所を訪れる折笠さんと松崎さん（左）

物資の支援、避難後の意向、雇用に関わっての協議など山積する課題をこなしていきます。
 福島原発から3キロしか離れていない双葉厚生病院では、避難勧告が出され、地震発生当初から、大きな混乱が続きました（福厚労双葉分会長・松崎純子さんの手記を参照）。
 僅かに30キロ圏外にある鹿島厚生病院でも、20〜30

大きな揺れは続いていたが、①独歩②護送③担送の順で非常階段から外に避難させた。（この時つくづく非常時こそ非常用出口はスロープじゃないとだめだなと感じた）
 ひどい揺れの中の作業であり、職員も悲鳴を上げながらの避難だったのだが、人工呼吸器・BIPAP装着の患者さん2名を、アンビューバックで避難した。外に避難したところで「津波が来るから精神科2階に避難して」と言われ、

（2面へ続く）

全厚労 第34回女性集会 in東京

いまだからこそ平和で人間らしく生きることのできる社会について考えよう

日時 2011年6月10日(金) 13時半
 ~11日(土) 正午

場所 浅草・台東区民館

宿泊 浅草ビューホテル

参加費 23,000円(1泊2食+参加費)

主な企画

記念講演

小森陽一さん（東京大学教授・九条の会事務局長）
 日本国憲法と私たちのいま・未来（仮題）

体験学習

東京大空襲の爪痕をフィールドワーク
 戦争体験者のお話など…



634mとなった東京スカイツリー（全厚労本部より）

へ1面から続く

患者さんを移動した。

その途中「妊婦さんが精神科の屋上にいるからK医師を屋上に連れてって」と師長より指示があり、OPP着姿のK医師を屋上に誘導した。(地震時、帝王切開の途中であり、一人出産出来たこと。のちにその子はスタッフから勝手に「津波ちゃん」と呼ばれていた。)屋上に上がって少したってからK医師が「あれが津波だったら大変だ」と言ったので海の方を見ると、水平線と近くの丘が一直線になっており、水平線は水しぶきを上げながら、あつという間に病院の近くまで水が上がってきた。少したつと救急車の音が何回も聞こえてきた。外来スタッフは溺水した患者さんの対応におわれていた。

3月11日夕方

独歩の患者さんは精神科の1階に、護送・担送の患者さんは精神科の2階にほぼ避難できたところで、県立大野病院に向向に行っていたスタッフが次々と戻ってきてくれた。それですつとアンビューを押ししていた2名の患者さんのために人工呼吸器やBIPAPを病棟から運び込み装着できた。また必要物品・栄養剤も取りに行き、患者さんの観察や栄養管理を始めた。自分で食事ができる患者さん・家族・職員は隣の老健施設による炊き出しのおにぎりが出た。また当院の

調理師さんたちが乾パンやおかゆなどの保存食を準備してくれていた。その後、勤務の割り振り

がされた。道路は隆起や陥没がひどく車で帰るのは困難との情報があり、家までの距離がある人を中心に夜勤を行う事になった。歩いてすぐ病院に来れる人は1度自宅に帰り、次の日の朝早めに病院に来るようにと指示があり、私は1度帰宅した。その時、第1原発から半径2キロ圏内の住民に避難指示となっていた。(当院は半径約3キロ)

3月12日朝

家の中も素足では歩けず、居場所もない状態で、余震も続いていたため睡眠もとれずに朝になってしまった。テレビを見ると第1原発から半径3キロ圏内避難命令となっていた。きつと病院も避難しなければいけないと思い、とりあえず必要なものを手に取り、早めに出た。病院では事務の方が避難の手配をしていたが、病棟では夜勤者が朝のおむつ交換・朝の食事はすませてあり、回診・点滴などの業務に入るよう指示が出た。(避難の準備は大丈夫なのかと疑問に感じたが、忙しくなり検討する時間はなかった)

時々外を見ると自衛隊・警察の姿が見えた。警察の人は防護服だった。ヘリの音も聞こえた。その頃、東電第1号機から放射性物質を含んだ水蒸気を出すとい

う事で、屋内退避とな

った。その後、バス2台が到着した。独歩・護送の患者さんの避難がはじまり、1台目のバスは病院全体で川俣に避難する事を伝え、出てもらったようだ。精神科の患者さんが多く乗っていた。しかし職員は乗車せず、その後連絡が取れなくな

った。2台目のバスは担送の患者さんを除いた精神科の患者さんが全員乗車。一般科の患者さんも数名乗車した。この時、精神科のスタッフはK主任のみ病院に残り、その他のスタッフも全員バスやマイカーで川俣に避難してしま

った。残ったスタッフには看護部長さんより「残った人は病院から出られる手段がない。ここに残ることになります」と話があった。思うところは多々あったが、引き続き業務を続けた。途中で、再度3病棟主任より集合をかけられ「原発が最悪の場合チェルノブイリの様な状態になる。避難するかここに残るかの選択が必要になる。」と話があった。スタッフの中で「なんでそんな選択を私たちにさせるのか」「早く避難したい」「帰して下さい」「せめて若い人は帰してあげましょう」など今までの思いが出てきたようだった。私は避難患者さんの放置となるため、とても答えが出なかった。



対策本部を訪れた松崎分会長(右)と山田中執

「自衛隊のヘリが来る。担送の患者さんを乗せるぞ。早く！」と病棟に来た。男性看護師はK主任以外2台目のバスで避難していたが、技術・調理師・医師・事務職員が手伝ってくれた。まず自衛隊の車で双葉高校へ行き、そこからヘリが出るとのこと。私は避難先でも車が必要になると思って、自分の車で移動したかったが、師長より「患者さんの管理を頼む、私たちも必ずあとから行くから」と指示があり、患者さんと一緒に自衛隊の車に乗った。双葉高校に着いて、待機のために屋内に患者さんを移動していた。ほどなくして見えたヘリが自衛隊のそれではなく、マスコミのヘリはほんとに薄情だと思っていた。その時、「ドーン」と大きな音とともに体に衝撃を受けた。立っていたところから1〜2歩後ろに下がってしまったほどの衝撃だった。「間に合わなかった。」と思った。(つづく)

(注:個人名や長文のため一部編集を行っています)

全国各地から医療支援へ

全国の厚生連病院からも医療支援が行われています。地震当初より、新潟、秋田、長野などよりDMATチームが派遣され、岩手、宮城、福島で活動したのを始め、その後も、各都道府県からの要請で、各病院よりDMATの出動、医療救護班の派遣、また厚労省の要請によるメンタルケアチームの派遣など、被災地の状況に応じて、様々な医療支援が行われています。

宮城県石巻市へ2度、支援に入った愛知県厚生連労組の長谷川さんに手記を寄せていただきました。

宮城・石巻日赤へ DMAT・救護班にて活動

石巻圏合同救護チーム・安城更生病院DMATチーム業務調整員 長谷川雅敏(愛厚労書記次長)

東日本大震災により、お亡くなりになられた方のご冥福をお祈り申し上げます。一度目は震災直後の3月11日、14日の4日間、日本DMAT隊員として、二度目は3月25日、30日までの6日間石巻圏合同救護チームとして活動させていただきました。

平成23年4月8日現在



山形県立中央病院へ患者をヘリ搬送

地震発生時には偶然にも愛知から遠く800キロ離れた石巻十字病院を当院職員4名(内1人はDMAT隊員)が見学中でした。4名とは地震直後に一度だけ電話が通じ無事が確認できたものの、その後の津波被害

により携帯電話をはじめすべての通信機器が不通となり、13日に合流するまでの長時間安否の確認が出来ず大変心配しておりました。

石巻十字病院の職員の方々は自分の家族の安否確認もままならない大変な状況にもかかわらず、4名に貴重な食事や寝具寝室を提供していただき、不安な気持ちを紛らわすため、やさしく声かけまでしていただきました。ほんとうに温かくもなしてくださりました。

DMATの任務が終了した3月14日に一旦愛知に戻りましたが、数日後状況を確認したところ救護チームが不足しているとの情報を得たため、お世話になった恩返しと感謝の気持ちを伝え少しでも役に立てればと再度26日に石巻十字病院へ到着し石巻圏合同医療チームの一員として活動を再開しました。はじめに石巻市沿岸部の壊滅的被害状況



地震発生時から連絡の取れなかったDMAT隊員と再会



避難所を廻って診察行う

そして最後に石巻圏合同救護チームの皆様の健康と更なるご活躍を心より祈念申し上げます。

大震災―その時わたしは2

松崎 純子 (福厚労双葉分会長)

3月12日18時

双葉高校体育館でヘリの到着を待った。患者さんの搬送とアンビユーで腕がパンパンに張っていた。たまにたまアンビユーを押ししていたため、重症の患者さんと一緒に1号機に乗り、済生会川俣病院に行くように指示があり、Dr・師長とともに中型機に乗ることになった。(私は高所恐怖症)

座るスペースもなく、中で腰でアンビユーを押し続けた。下にグラウンドが見えたが、救急車が到着していないため上空で旋回し、なかなか着陸せず、患者さんは気圧が下がると共にサーチユレーションも下がっていた。不安が大きくなり、とてもストレスだった。

ようやく到着すると「ここは二本松です」と言われ、川俣の職員と合流することが出来なかったが、つかり感と、患者さんをどうしたらよいだろうかと思惑した。

すでに滋賀県から救急隊が到着しており、救急車で「男女共生センター」に着いた。そこから重症患者を搬送する手配を行った。搬送について行ったスタッフによると、搬送先でお菓子をもらった「あなたたちも被災者なんだから体を大事にね」と声をかけられ涙が出そうになったと言っていた。

二本松に着いた患者さんは約十数名、患者さんとはぐれてしまった家族を含め、近隣施設のスタッフ1名・利用者さん約5名ほどいた。当院スタッフは、看護師十数名、医師1名、事務・技術3〜4名と患者さんに対してスタッフ数は十分だった。しかし病院全体で川俣に行く予定だったので、2台目のバスに物資をすべて乗せていた。そのため患者さんに必要な点滴や経管栄養を行えなかった。

せめて食べられる患者さんや家族にと、近くのコンビニ5軒程まわったが、すでに物資がなく、硬いSOYJOYや甘い飲み物を買ってきた。しかし職員までは数が足りなかった。

夜遅くなってから手作りにぎりが届いた。正直、食欲はほとんどなかった。しかし患者さんのことを考えると、多少の無理はしないと、いけなげな思い、1個をやつと食べた。

二本松にいないスタッフと連絡を取り、他の2機は宮城の自衛隊基地に行ったとのこと。そこで癌末期の患者さんが、ヘリの中で亡くなった事を聞いた。家族がそばにいない中、冷たいヘリの中で亡くなった患者さんのことを考えると、せつなくなってしまう。川俣にも連絡が取れた。翌日朝早く物資を届けてもらうよう依頼した。しかし、そこにもいない院長や看護部長・調理師のEさん・K主任達には連絡が取れず、もう1機のヘリの行先が不明で、ただただ心配だった。

その日、二本松にいた患者さんは、いまだに栄養摂取や点滴・酸素投与が出来ず、重症心不全の患者さんなどは呼吸・脈が弱く、翌日早いうちに他の病院へ搬送の手配がされた。その他の患者さんも、順番を決め、搬送の予定が決まった。

二本松にいた患者さんとスタッフは、全員サーベーターを受けた。やはり爆発時、患者搬送のため外にいた13人の職員が、翌日除線の対象となった。

3月13日朝

朝から当院の患者さんの搬送が始まった。その中「今からCPA(心肺停止)の患者さんが入ります」と連絡が入った。「ここは病院じゃないのになぜ?」と感じた。

搬送に入ってからすぐ、重症心不全の患者さんの順番になり、「やつと安全なところにいけるよ」と声をかけたところ:反応がない。何回も名前を呼んだが、脈もなく、K先生を呼び、死亡が確認された。間に合わなかった。

この日は、朝からマスクミ・DMATや自衛隊・救急隊・サーベーターのチームが出入りし、出入りも厳しくなっていた。こっちは医師もいてトリアージも終了していたため、DMATからは酸素ボンベなど、機材を借りることになった。助かった。

昨日、搬送が決まった患者さんをピストン移送している中、次々に患者さん・家族・近隣の施設利用者さん・双葉町民が到着した。みんな、外でサーベーターを受けた後中に入ってきた。みんな昨日宮城県の自衛隊基地に行っていたスタッフと患者さん・本日もなつてへりで双葉から避難してきた施設職員・利用者・町民だつた。施設内は急にパンク状態となり、トリアージもままならなくなつた。合流できた職員も到着してすぐに業務に入ることになつた。そして行方が分からなくなつてもう1機も到着。暗くなつてしまつたため、昨日のうちにヘリが飛ばず、一晩双葉高校の体育館にたのこと。その人たちのことを考えると、ショックが出た。

搬送に入ってからすぐ、重症心不全の患者さんの順番になり、「やつと安全なところにいけるよ」と声をかけたところ:反応がない。何回も名前を呼んだが、脈もなく、K先生を呼び、死亡が確認された。間に合わなかった。

この日は、朝からマスクミ・DMATや自衛隊・救急隊・サーベーターのチームが

出入りし、出入りも厳しくなっていた。こっちは医師もいてトリアージも終了していたため、DMATからは酸素ボンベなど、機材を借りることになった。助かった。

昨日、搬送が決まった患者さんをピストン移送している中、次々に患者さん・家族・近隣の施設利用者さん・双葉町民が到着した。みんな、外でサーベーターを受けた後中に入ってきた。みんな昨日宮城県の自衛隊基地に行っていたスタッフと患者さん・本日もなつてへりで双葉から避難してきた施設職員・利用者・町民だつた。施設内は急にパンク状態となり、トリアージもままならなくなつた。合流できた職員も到着してすぐに業務に入ることになつた。そして行方が分からなくなつてもう1機も到着。暗くなつてしまつたため、昨日のうちにヘリが飛ばず、一晩双葉高校の体育館にたのこと。その人たちのことを考えると、ショックが出た。

搬送に入ってからすぐ、重症心不全の患者さんの順番になり、「やつと安全なところにいけるよ」と声をかけたところ:反応がない。何回も名前を呼んだが、脈もなく、K先生を呼び、死亡が確認された。間に合わなかった。

この日は、朝からマスクミ・DMATや自衛隊・救急隊・サーベーターのチームが

た。

しかし、ここに来た人全員を私たちが見なければいならず、合流したスタッフ・医師とともにトリアージ・搬送を行った。施設利用者の中には、避難途中で具合が悪くなる人もおり、当院の患者さんだけでなく、医師の指示で次々と点滴を開始した。

物資は、川俣に避難し自由に動ける4人のスタッフが集めてくれた。ガソリンのない中、出来る限り点滴・それに伴う必要物品や着替えを届けてくれた。

着替えが届いてから、前日除線対象となつたスタッフの除線が始まった。

その際、自衛隊からは、外の除線室までそのまま行つていいと言われたが、川俣から応援に来てくれたスタッフの一人から「被曝してるんだから、建物の中で服を脱いで、バスタオルを巻いて外に出て」と心ない言葉を言われ、共に頑張つてきたスタッフの中で怒りが出た。

除線が終わり、サーベーターを受け、OKをもらえたので、外に出ることが出来た。外には、被曝していないスタッフが数人集まつており、汚染区域に入らず、川俣に行く相談をしていた。この時たまに外に出ること

のできた事務職員1名と私も声をかけられたが、中にいる患者さんや、業務の大変さを考え事務職員と共に「中に戻ります」と言つて戻った。

この日は、ある程度スタッフも集まつたため、業務を忘れてゆっくり休めるようにと看護部長のはからいでシフトを組んでくれた。シフトを組むと数名になつてしまつたが、避難してはじめてゆっくり休憩することが出来た。

休憩時間に入ると、川俣に避難した患者さんの搬送が翌日で終了、その後解散になるとの連絡が入つたこと、日中当院のスタッフから言われた一言から「何で川俣にいるスタッフは二本松に応援に来ないんだ。Dエだつて疲れている。交代要員は来ないのか」と話が出るようになった。

私のシフトは22時〜4時までだった。私は普段、副

腎腫瘍のOP後で主治医より薬の調整が出来ず副腎不全になってしまったため、深夜帯の勤務はしないようにと言われて準夜勤しかできずにいたが、この数日だけ体がもてばいいと考え、いつもより多く薬を内服して対応した。

夜勤は大変だった。当院の患者さんみにとどまらず、施設利用者さんの状態変化や夜間せん妄の対応までしていたため、座っている時間はほとんどなかった。しかし暗くなってからも救急隊や受け入れ病院が対応してくれたため、患者さんは日中より減つていった。

3月14日

本来はシフト上休憩だったのだが、搬送の手配が出来たと連絡が入り、動ける人は業務に就いた。それでも施設利用者さんの中で状態が悪化した人もおり、当院の患者さんは後回しになり、搬送にも看護師がついていったため、なかなか作業は進まなかった。

とある病院で、多数の患者さんを受け入れてくれたのだが、あるスタッフは「何で尿崩症があるのにフオーレが挿入されていないのか」など、被災し物品がない中でどうにもならないことをいくつか聞かれ、辛かつたと言っていた。

搬送が一時落ちついた時、シャワーを浴びることができた。その時「折笠さ

んが来ているよ」と声をかけられ、外に出ようとした。しかし、サーベーターで足底部がひっかかり出入口までしか出ることが出来なかった。

私はシャワーを浴び、さっぱりしていたのと、二本松にいるスタッフはまとまつていて、辛い中にも楽しさがあり、なんとかやつていたつもりだったが「折笠さんが号泣」「鹿島も大変な中、O君が来てくれていい」「手作りおにぎりを作つてきてくれた」「来てくれた人達からの温かい声」により、みんなのやさしさが伝わりグツときた。私も号泣してしまつた。ずっと食欲もなくあまり食べてなかったが、久々にあったかにおにぎりを食べた。ほんとおにぎりが食べた。本来非組合員の師長さん達も「ほんとに感謝しているとお伝え下さい」と言っていた。物資も助かったが、気持ちまで救われた。

搬送は、やはり施設利用者さんも多く混じつたため、当院の患者さんが9名残つていた。搬送時は、この数日間なじみの患者さんにずっと寄り添い、物資がない中様々な工夫をしながら、看護してきたため、患者さんが搬送されるたび「元気でね」「また、双葉で会おうね」など涙で送り出し、患者さんが安全なところに行ける安心感とともに寂しさも大きくあり複雑な心境だった。(つづく)



二本松男女共生センターで被曝検査を受ける避難住民 写真 森住卓

大震災—その時わたしは3

松崎 純子 (福厚労双葉分会長)

3月14日夜

まだ患者さんが残っているため、今まで自分たちの今後のことを考えられる余裕がなかった。しかし、翌日中に患者さんの搬送が終了するとの報告が入り、スタッフのそれぞれが「明日解散になったらどこに行こう」とやっと自分たちの身の振り方の話ができ、翌日中に施設を出るといふ人も多くいた。このころには、毎日除線をし、施設空間内の線量も減って、ある程度自由に行動できるようになっていた。

また私も、川俣にいるYくんより「翌日朝一番で身内が迎えに来るから、その時一緒に会津に行こう」と誘いがあった。私も施設を出るつもりだった。みんなやっと自分たちの話をしていった。事務部長が看護副部長のところに来た。「1台目のバスの行先がわかった。浪江町のオンフルール(老健施設)にまだいるようだ。だから連絡が取れなくなっていた。患者さんがオンフルールにいる。」と話していた。みんな、言葉が出なかった。少したって看護部長より「当院の患者さんがオンフルールにいるとわかった以上、悠長なことを言っていられない、すぐ迎えに行く。その場合、夜中に到着する可能性がある。もちろん当院の患者さんは



避難所でも医療活動が続ける双葉の組合員たち

にこの施設を出るといふ人が何人もいた。やはり、将来のことを考えるとこれ以上の被曝は避けたいとのことだった。私も痛いほど気持ちが悪かった。「もう充分私たちはがんばったよ。本来、今までもそうだが、被曝医療になるので、私たちがする領分ではなく、専門スタッフが入ってくるべきもの。ほんとは、出入り口で防護服来て『ここから出るな』とか言っていた医療チームがやるべきこと。今帰っても、ここまで頑張ったんだから誰も文句言わない。出られる人は出た方がいい。私たちに何の防護服もないのだから」と言った。また、医師の多忙さも心配だった。これ以上業務が伸びれば、先生の体もたないと思った。

その後、再度ミーティングがあり、看護部長さんには「この状況は、スタッフを強制的にひきとめるのに相当過酷な状況で、なんの装備もない中だし、無理な帰してあげてほしい」と発言した。看護部長も連日の調整で率先して動いており、今回も夜になってからの出来事にも関わらず、出来るだけのことをしていくと承知していたが、目に見えない放射線に対する不安とそれに対する対策が行き当たりばったりで、無防備な

状態でも今後も業務にたずさわることへの不満が出ていたようだった。私も「被曝医療を専門的に行える人が、なぜ来ない。一番最初に被曝者13名と報道があった場所なのに。」と思っていた。

その時、「川俣から5人応援に来ました。」と報告があり、入口を見ると、ついさつき電話で「先に会津に帰って」と伝えていたはずのY君も来てくれた。川俣からのスタッフが入り、患者さんを2階に移動した。移動後、休憩している間に10人のスタッフが施設から出ていた。みんな、泣きながら出たとのことだった。

3月15日

朝、本来夜勤だったスタッフがでてしまったため、残っていた1人のスタッフが患者さんを見ていたと聞き、早めに動き始めた。夜中のうちに自衛隊の人数が増え、朝になると自衛隊バスが2台入ってきた。ミーティングが始まった。

本日の予定が説明された。そして、看護部長より「看護スタッフは川俣から5人応援に来て、10人が施設を出ています。」と話があった。技術スタッフからは、「行くところがない人が、大変な思いをしるということか」との発言が聞かれた。その人の気持ちもわかる気がしたが、それ以上に、これからのことがとても不安だった。

ミーティングの最中、部長の所に電話が入った。「オンフルールの患者さんは那須に向かいました。」突然の知らせで驚いたが、ちょうど国より、県内の避難所はいっぱいになったため、県外への避難誘導指示が出たとのこと。そのため、本日の搬送が終了したら、解散ということになった。

取れるように、放射線科のT君が物資の管理をしてくれた。T君は被曝しておらず、ガソリンもない中、避難してから毎日実家から二本松に来てくれて、いつも「何もできないけど」と言いながらも私たちのことを心配し、朝から夕方までいてくれた。

最後に搬送する患者さんの病棟看護師が救急隊に申し送りをする時、一人一人搬送先の病院で安心して療養できるように願いを込めながら「お願いします」と送り出した。

況の中、ALSの患者さんまでみんなで助けなくちゃとがんばって搬送した。病院にいた人全員搬送してきただ。誇りに思うよ。また、双葉再建するときはがんばろうね。」と言っていた。また涙が出てきた。

最後の患者さんは精神科の患者さんだった。しかし、今までの患者さんと違って避難生活や、辛かったことを思い出しながら、一般科のスタッフも一緒に見送った。感無量だった。ほとんどの職員が「お疲れさまでした」と泣きながら、あいさつした。

でも心を打たれた。そして、勉強させてもらったと思う。

災害時の対応は、マニュアル化されているが今回のことで、マニュアル通りに事が運んだことがなく、私たちが助けてくれたのは、時々かけてくれる上司の一言や、搬送先の看護スタッフからの温かい言葉と、組合員さんの行動してくれた気持ち、また支給品と共に添えてあったメッセージだったと思う。

その後、看護部長・副部長をはじめ、管理職のみならずと一部の看護スタッフとで那須に行ったと思われた患者さんがいわきにいらわきへと向かい、全員の患者さんの所在確認をした。そして、今バラバラになっていた職員の仕事配に尽力を尽くしてくれた。患者さんの搬送にかかわった救急隊のみならず、自衛隊の皆さんにこんな混乱の中、被曝覚悟で携わっていただいたことに大変感謝している。しかし、忙しいさなかのことで、きちんとお礼もできないままになってしまったことが悔やまれてならない。

今回のことで、組合の機動力の高さに驚いた。また一緒に病院で働いていたわけではないのに、心配して駆け付けてくれたことにも

3月11日の東日本大震災・原発事故から3カ月余りが経ちましたが、震災復興も原発事故の収束も未だ道筋が見えていません。政治も、被災者の事などそっちのけの政局に走っています。私たちの声をもっともっと強くしなければなりません。(編集部)